
不良少女探偵・黒田瞳の事件簿．．． 殺害された赤馬

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不良少女探偵・黒田瞳の事件簿・・・殺害された赤馬

【Nコード】

N1607B

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

5年前の放火事件と、今回の連続殺人が今、一つに繋がる！

プロローグ（前書き）

一部で続編が読みたいと言う人がいたので、思い切ってやっちゃいました。

そう言う訳なので、今回も宜しくお願い致します。

プロローグ

5年前、都内のとある民家で、放火事件が起こった。
付近の住民が、消防隊に通報し、火は消し止められたが、燃え跡か
ら男性の焼死体が見つかった。
放火犯は未だに捕まっていない。

1. 探偵学園（前書き）

笑い狙ってます。

1. 探偵学園

「やっべええええ！」

と、何処にでもある、普通の二階建ての家から、慌てて飛び出して来たのは、殺人と言う前科持ちの、オレっ娘女子高生探偵、黒田くろだ瞳ひとみだ。

何故、彼女が慌てているのか？それは、寝過ごしたからである。

キーンコーンカーンコーン

——学校内に二時間目開始のチャイムが鳴り響く。

そして、その学校、＜園田探偵学園＞（そのだたんていがくえん）の昇降口では、瞳が血相を変えて靴を履き替えていた。

園田探偵学園とは、世界の歴史に名を残した有名な探偵、園田そのだ菊右衛門きくえもんが創設した、探偵を育成する為の学園だ。今年で創立135年を迎える。

「遅刻だあああ！」

そう叫んで、扉を思いつ切り開いて、教室に入って来たのは瞳だ。

「何だ黒田、また遅刻か！？」

廊下に立つとれえ！」

そう怒鳴り散らしたのは、瞳の担任の、上松うえまつ 右京うきやうだ。

と言う訳で、瞳は今、廊下に立っています。しかも、水入りのバケツを両手に持たされて……。

（つたく、何でオレが廊下でバケツ持たされなきゃいけないんだ？
つうか、此処の校則厳しすぎなんだよ！）

と、敢えて心の中で文句を垂れる瞳。

そう、この学園の校則では、理由無しに遅れてきた生徒は瞳の様に廊下に立たされる事になっている。無論、寝坊による遅刻もこれ

に入る。

キンコンカンコン

——2時間目終了のチャイムが鳴った。

瞳は漸く、廊下立ちから解放された。

「疲れた・・・」

と、瞳は教室の自分の席に座って寝そべった。

「おっ、不良娘が死んでる」

そう言ったのは、メガネを掛けたくりくり頭の、五十嵐 勉だ。

「五十嵐・・・——勝手に殺すな。」

それと、オレは不良じゃねえ！」

そう言っつて、瞳は五十嵐を睨み付けた。

すると、ショートヘアの女の子が声を掛けた。

「あんた達、次体育館だよ」

「知ってるよ！」

そんな事より、オレを助けてれ。

こいつが乗ってて動けないんだ。

つて、あんたこんな時にどこ触って・・・ああん！」

「ちよつと五十嵐君、やめなさいよ！」

「五十嵐ー！」

瞳はキレて、五十嵐を放り投げ、殴り始めた。

ボガッ、ボグッ！

暫く御待ち下さい・・・。

30秒後、五十嵐は気絶していた。

「テメエがオレのチ○ビ触れっからいけないんだ！
そこでおとなしくしてろ！」

そう言って、瞳は教室を出て行った。

「黒田さん待って！」

と、女の子の方も付いて行く。

「黒田さん」

「ああ？」

「五十嵐君、大丈夫かな？」

「あんな奴の心配する必要無いぜ」
その答えに女の子は足を停めた。

「どうして!？」

「あいつのやってる事、^{かえで}楓だって知ってんだろ？」

瞳はそう言って、楓と呼ばれる女の子の前を通り過ぎて行った。

1. 探偵学園（後書き）

笑えなかった人、ご免なさい。

2. 罰

S D S（園田探偵学園）体育館内。

「今日、皆さんに集まって貰ったのは他でもない」

そう言って、舞台のスクリーンに注目させる園田学園長。

そこには、＜実技試験（臨時）＞と書かれている。

どうせまた学園長の思いつきだろう・・・——瞳はそう思った。

「抜き打ちかあ、嫌だなあ・・・」

瞳の隣で、楓はそう呟いた。

「何で？」

と、振り向く瞳。

「だってさ、学園長が考えるのって、殺人事件ばかりなんだもん。嫌んなっちゃう・・・」

「そうか、お前は死体とか苦手だったもんな」

「それに比べて、黒田さんはまだ良いよ。」

死体見ても全然平気だし」

「オレは・・・」

そう言いかけた時、瞳の耳に学園長のこんな言葉が聞こえて来た。
「と言うわけで、今日は実際に起きた殺人事件を解決して貰います
！」

（実際に起きた事件？）

瞳は、真剣な表情で、学園長の話を聞く。

「どうしたの？ 怖い顔しちゃって」

楓はそう聞くと、瞳の耳には届いていなかった。

「ねえ、無視？」

「・・・」

「ねえったら」

バコッ、バコッ、バコバコッ！

——瞳の額にムカツキマークが数十個程現れた。

「ああもう！

楓の所為^{せい}で話が聞こえねえなかったじゃねえか！
どうしてくれんだあ？」

と、拳をポキポキ鳴らし、目を真っ赤に光らせ、とても恐ろしい表情で楓を睨み付けた。

すると、スピーカーを通した学園長の怒鳴り声が聞こえた。

「そこ静かにしてろ！

罰としてお前達二人には、5年前に起こった未解決の放火事件を解決して貰う！」

瞳は目を点にすると、学園長の方を振り向いた。

「あの、今、何て、言いました？」

「5年前の未解決放火事件の解決だ」

と言う訳で、二人は5年前に起きた未解決放火事件の捜査に駆り出された。それが、殺人事件を引き起こす物になるとは、二人には知る由も無い。

2. 罰（後書き）

ん、話が短い？
ふっふっふ、予定通りさ。

3. 放火跡殺人事件（前書き）

予定通り順調さ。

3. 放火跡殺人事件

グサツ！

——ナイフが腹に刺さった。

「うっ！」

男は驚き、その場に倒れ、意識を失った。

ブウウン！

——バイクの音が聞こえる。そして、その音は段々と近付いて来た。乗っているのは、瞳と楓だ。

瞳は右手で前輪ブレーキを、右足で後輪ブレーキを掛けた。

ブレーキが掛かったバイクは、スピードを落とし、止まった。

「此処だな」

瞳はヘルメットを取ると、そう呟いた。

此処は、5年前に放火があった場所だが、今は空き地になっている。

「あ、あれ・・・」

と、楓は顔を真っ青にし、あるものを指差した。

「どうした？」

と、瞳は振り向いた。

「だから、あれ見て！」

そう言われ、楓が指差した方向を見る瞳。

するとそこには、腹にナイフが突き刺さった男が血を流して倒れていた。

（あっ！？）

瞳は駆け出し、男の脈を調べた。

（死んでる・・・）

と、その時、女性の叫び声が聞こえて来た。

「きゃああああ！」

人殺し！」

瞳は慌てて振り向いた。

すると、こっちを見て指差していた女性が逃げて行った。

何なの？——楓はそんな感じで、女性が走って行った方を見た。

「あの人、警察行ったな」

瞳はそう言った。

「何で分かるの？」

「何と無くだ」

「何それ？」

「どうでも良いが、学園に連絡しとこうぜ。殺人事件に出くわしたってな」

「じゃあ私、連絡するね」

楓はそう言って、携帯を取り出し、学園に連絡をした。

すると、学園はこう言って来た。

「その事件解決するんだ」

そんな事言われても——楓はそんな顔をしながら、

「やってみます」

そう言って、電話を切った。

「何をやるの？」

「事件の捜査」

と、その時、交番のお巡りさんと、さっきの女性がやって来た。

「あの人です！あの人が男の人を！」

「ちょっと待て！」

オレはやってねえ！」

「やってないと言ってますよ？奥さん」

と、お巡りさん。

「私は見たのよ！」

この女が殺した所を！」

「奥さん、落ち着いて」

お巡りさんは必死になだめるが、女性は静まらない。

瞳は仕方なく、女性の腹を殴って、気絶させた。

「なっ、何やってるんですか!？」

「安心して、眠らせたただけだから」

「そうは言ってもね・・・」

「ほらよ」

瞳は懐からS・D手帳を取り出し、お巡りさんに見せた。

「ごっ、ご苦労様です!」

そう言って、敬礼をするお巡りさん。

「あのさ、あの人調べて欲しいんだけど」

瞳はそう言って、遺体を指差した。

「では、警視庁から捜査一課呼びますので、暫くお待ち下さい」

そう言うとお巡りさんは携帯を取り出し、警視庁に連絡をした。

4. 第二の殺人

ちよつと前、ある場所で、男の遺体が見付かった。

男の名は、小渕 おぶち 孝之 たかゆき。

発見当時、小渕は腹に包丁が刺さっていた。死亡推定時刻は、午後1..00~1..30頃。

また、遺体には争った形跡が無く、いきなりやられたのでは無いか、と言う事だ。

「成る程、5年前の未解決放火事件の捜査で現場を見に来たら、男が死んでいた、と」

信じられないな——とでも言う様な顔で、刑事は言った。

「それにしても、元殺人犯がS・Dの生徒になるとはな」

その言葉に、楓は目を点にし、

「殺人犯？」

「馬鹿っ、それ内緒だろ！」

と、瞳は刑事を睨み付けた。

刑事は笑って、

「そうだったな。わりいわりい」

「笑い事じゃねえよ！」

瞳は刑事の足を踏み付けた。

「いってええええ！」

「黒田さんそれはまずいって！」

すると瞳は振り向いて、

「良いんだ。こいつ、オレの兄貴だから」

と、親指で刑事を差して言った。

「黒田さんお兄ちゃんいたの!？」

と、驚く楓。

「そんなに驚く事か？」

「そりゃ驚くよ！」

だって黒田さん、兄妹がいるようになって見えないもん！」

楓はそう言ったが、兄とお話をしている瞳は、全く聞いていなかった。

「話聞いてよ……」

と、その時、

「黒田警部！」

と、見窄みすぼらしい一人の刑事が慌てて駆けつけて来た。

彼は水嶋みずしま慶太けいた。瞳の兄の部下である。

「水嶋君、どうかしたの？」

その問いに水嶋刑事はこう言う。

「直ぐその神社で女性の遺体が発見されました。」

その空き地で見付かった男性と同じ殺され方です」

「行くぞ瞳！」

兄はそう言って、走り去って行った。

「行くよ楓！」

と、瞳も走り去って行った。

「黒田さん待って！」

そう言って、楓は瞳の後を追った。

——午後6…50、馬橋まばしいなりじんじや稻荷神社。

舞殿まいどのの前には、Keep outと書かれた黄色いテープが張られている。

そしてその中に、腹を包丁で刺された女性の遺体が置かれている。

瞳とその兄は手合わせをした。

「鑑識さん……—遺留品に害者の身元が判る物って無い？」

瞳の兄は傍にいた鑑識に訊ねた。

「免許証ならありますけど」

「それ見せて」

瞳の兄は、袋に入った免許証を受け取った。

＜鈴木 千恵＞——免許証にはそう書いてある。

「そう言えば……」——鈴木 千恵って、殺人罪で指名手配されて無かったか？」

そう言ったのは、免許証を横から覗き見している瞳だ。

「そう言えば、署の掲示板に貼ってあったな」

「ねえ、あそこ見て」

瞳はそう言って、正面の壁を指差した。

そこには、血文字でこう書かれている。

＜K・K＞

恐らく、被害者が残したダイイングメッセージだろう。

その証拠に、被害者の人差し指が、壁に触れている。

（ん？）

瞳は被害者の握られた手の隙間から、中に何かあるのに気付いた。

「兄貴、この人何か握ってる」

そう言って、被害者の握られた手を指差す瞳。

兄は、被害者の手を開こうとした。

「固い。硬直しきってる」

「オレがやる」

瞳は握られた手を、無理矢理こじ開けようとした。

「そんな事して、死亡推定時刻がずれたらどうすんだ？」

「昨日の午後11…00前後だ」

そう言いながら、瞳は硬直した拳を完全に開ききった。

「どうして判る？」

「硬直具合から計算したんだよ」

「お前は医者か？」

「法医学の勉強してんだよ！」

と、怒鳴りつける瞳。

「そうなのか。」

で、そのボタンは何だ？」

瞳は学園から支給される手袋をはめ、ボタンを手を取った。

「引き千切られた跡があるぞ。

恐らく、犯人と争った時に引き千切ったんだろ」

そう言って、免許証と共に、鑑識に渡す瞳。

「それより、気になるのはK。Kだな。

兄貴・・・——被害者の交友関係、洗っつけ。ついでに小渕の方もな」

（勝手に仕切るなよ、不良娘が・・・）

兄は心の中でそう呟いた。

「あ、そうそう。オレは不良なんかじゃねえからな」

その突然の発言で、兄はギクツとした。

5. 取り調べ

警視庁捜査一課の取調室の傍聴室ぼうちょうしつで、瞳は先程から取り調べの様子を見ていた。

「どうやら、一人目の容疑者が挙がったらしい。」

「この凶器からあなたの指紋が出て来た。」

「これ、あなたのだな？」

「そう言っ、袋に入れられた包丁を、容疑者と思われる男性に見せつける刑事。」

しかし、男性は喋らない。

それから10分経っただろうか。

なかなか答えない男性にイライラし始めた刑事は机を叩き、

「黙ってないで答えろよ！」

と、怒鳴りつけた。

しかし、男性は微動だにしない。

（駄目だこりゃ・・・）

刑事は遂に諦めて出て来てしまった。

「答えなかったな」

瞳はそう言った。

「ええ。」

「そうだ、君が取り調べしてくれる？」

「何でオレが？」

「だって君、可愛いから、あの人も何か喋ってくれるかなって思っ
て」

「しょうがねえな」

瞳はそう言っ取調室に入ると、椅子に座って容疑者と向かい合
った。

容疑者は心臓の鼓動をドクドクと高鳴らせ、赤面しながらこう思
った。

(か、可愛い)

その容疑者に瞳はこう訊ねる。

「あんたが何考えてるか知らんけどさ、質問くらいは答えたらどうだ？」

と言う訳で、あんたの名前教えてくれ」

「自分こがわは小川 太一たいちっす！」

趣味は釣りです！」

ブチンッ！——瞳の堪忍袋かんにんぶくろの緒おが切れた。

「てめえの趣味なんか聞いてねえよ！」

ボグッ！——瞳の米利堅めりけんが小川に飛んだ。

「痛いなっ、何すんだよ!？」

小川は瞳を殴り返した。

ガスンッ！——瞳に避けられ、カウンターを喰らった。

小川は鼻血を出した。

「あ、わりい・・・」

瞳はそう呟いた。

「それはそうと、あの凶器にあんたの指紋が付いていたと言う事だが、あの包丁はお前の物なのか？」

すると、小川は震えながら答えた。

「た、確かに、あれは、俺の、包丁ですけど・・・でも、殺したのは、俺じゃありません！」

「本当か？」

「ほっ、本当です！」

「じゃあ、一昨日の夜11時頃は何処にいた？」

「自宅の近くの、飲み屋で飲んでました」

「昨日の午後1..00~1..30頃は？」

「そ、それって、小渕が殺害された時でしょ？」

(・・・)

「俺はその時は家にいたよ」

「あんた、小渕に会ってるのか？」

「朝、ランニングしてる時にな」

「じゃあそれが最後に見た姿か!？」

瞳は興奮した。

小川は頷いた。

「その時彼に変わった事は!？」

「女に追われてる——そう言ってた」

「女？」

「詳しくは分からないけど、5年くらい前に何かしでかしたらしいですよ。」

それで女に追われてるんだとか

(繋がった!)

瞳は取調室を慌てて飛び出した。

「何処行くんだ瞳？」

兄は慌てて署の廊下を走ってる瞳に声を掛けた。

瞳は止まると、

「5年前の放火事件の時の被害者の名前は!？」

「香川^{かがわ} 治男^{はるお}だった気がするが・・・それがどうかしたのか？」

「5年前の放火と今回の事件が繋がったんだ!」

それと、その被害者に奥さんはいるのか!？」

「香川 喜美子^{きみこ}ってのがいるぞ」

「そいつ今は何処に!？」

「ちょっと待て!

お前はそいつが犯人だと?」

「確証は無え・・・けど、可能性はある!」

「よし分かった!

車を出すから乗れ!」

そう言うと、兄は駆け出し、瞳はそれを追った。

6. 不自然な自殺

ブオオオオオン！——兄は車を飛ばした。

「後5分で着くからな！」

「そうか・・・って、スピード出し過ぎだろ！」

「五月蠅い！」

キイイイイン！——兄は豪快なドリフトを決め、コーナーを曲がった。

「うお！」

瞳は吹っ飛びそうになった。

「燃えるぜえ！」

兄は体中を燃やしながら叫んだ。

「兄貴、体火付いてっから！」

「黙ってろ！」

キイイイイン！——兄は再びドリフト。その度に瞳は、

「ぎよえええええ！」

と、悲鳴をあげる。

「着いたぞ！」

兄は言った。

何時の間に着いたの？——瞳はそんな顔をした。

ボタンッ！——瞳は車から降りた。

目の前には、5階建てのアパートが建っている。

瞳達は、そのアパートに入って行った。

505号室の前。

「此処だ」

ピンポーン！——兄はチャイムを押した。しかし、出て来る気配は無い。

兄は再び押してみた。が、やはり出て来る気配は無い。

「開けちゃおうぜ」

「それはまずい」

ガチャ——瞳は扉を開け、中に入って行った。

「入るなよ・・・って!？」

兄は何かを見た。

「死んでるぞ」

瞳は言った。

「見りゃ分かるよ」

「取り敢えず、降ろしてやらないか」

「そうだな」

二人は目の前で首を吊って死んでる女性の遺体を降ろした。

「こいつが香川 喜美子か？」

「ああ」

「おい、遺書があるぞ」

「何？」

瞳は部屋のテーブルに置いてあった遺書を取って兄に渡した。

——遺書

『小渕 孝之、鈴木 千恵を殺したのは私です。首を吊って死にます』

それは、ワープロで書かれていた。

(自殺・・・にしては変だな、この部屋。

首吊りに使った椅子は無いし、部屋には微かに甘い匂いが・・・
甘い匂い!?)

その時、小川の顔が瞳の脳裏に過った。

「兄貴、オレは警視庁に戻る!」

「何で!？」

「真犯人が解ったんだよ」

「何だと!？」

兄がそう言った時、瞳は既にいなかった。

「ああっ、遺書が無え!」

あいつ持って行きやがったな!？」

警視庁捜査一課取調傍観室。

瞳は息を切らしながらその部屋に入って来た。幸い、小川の取り調べはまだ行われていた。

ガタン!——瞳は取調室の扉を勢いよく開けて中に入った。

「小川っ、香川 喜美子を殺したのはお前だな!」

6. 不自然な自殺（後書き）

何この急展開？

7. 真相

「小川っ、香川 喜美子を殺したのはお前だな！」

瞳はそう言っ、机を思いつ切りバンツと叩いた。

小川は瞳の迫力に驚き、椅子から転げ落ちてしまった。

「吃驚したなあ。いきなり何ですか!？」

「お前は此処に呼ばれる数時間前、香川 喜美子の自宅に行き、香川 喜美子の首を絞めて殺害した」

「俺が喜美子を？」

「一体どうやって!？」

「クロロフォルム。現場に使用した跡が残っていたよ。」

あんたはクロロフォルムを使用し、香川を眠らせ、首を絞めて殺害。その後、遺体を天井に吊し、自殺に見せ掛けた。

しかし、あんたは此処でミスをしたんだ。それは椅子だ。現場には首吊りに使われた筈の椅子が無かったんだ」

「ちよっと待ってくれよ。それだけの事で何で俺が殺人犯になるんだ？」

「クロロフォルムだよ。」

あんたと初めて会った時、微かに甘い香りがしたんだ。クロロフォルムの独特なのがね」

「そんな馬鹿な!？」

俺はちゃ・・・はっ!？」

小川は思いつき焦った。

「どうした!？ 此処まで来たんだから躊躇う事は無い! 吐いてしまえ!」

瞳はノリで言った。しかし、小川は口を閉ざしたまま喋らなくなっってしまった。

「何故黙る?」

瞳はそう訊ねるが、小川は俯くだけで何も言わない。

（困ったな・・・答えてくれないと先に進め無いんだよな。

仕方無い、滅茶苦茶恥ずかしいけど、あれをやるか）

瞳は心の中でそう呟き、小川の真後ろに回り込んだ。そして、小川に覆い被さる様な感じで、背中に貼り付いた。

小川は、一瞬にして顔がカーッと赤くなった。更に、心臓がドクドクと早くなり始めた。

「小川さん・・・——あたし、小川さんともっとお話したいな」

「わ、分かった。な、何から話せば良いかな？」

「香川 喜美子について、知ってる事全部教えてくれないかな？ね、オ・ネ・ガ・イ」

小川は顔を更に赤くし、鼻血をタラッと垂らした。

「鼻血が垂れてるわよ」

瞳はそう言って、小川の鼻血をポケットティッシュで拭った。

「あ、ありがとう」

「あのさ、そろそろ話してくれないかな？香川 喜美子の事・・・」
「そうだったね。」

あれは一昨日の事だった」

それは二日前の事・・・。

その日、小川は香川家に来ていた。

「ほらほら、もっと飲んで」

喜美子はそう言って、小川に酒を注ぐ。

酔って顔を真っ赤にしてる小川は、喜美子の注いだ酒を、グビグビと飲んだ。

「5年前の放火事件覚えてる？」

「5年前の放火？」

嗚呼、あれか。覚えてるよ。孝之と千恵と俺の三人で家燃やしたんだよ。そしたらそこに男がいて、焼死しちゃったんだったなあ」

「へえ、あれあんたが犯人なんだ。へえ」

喜美子是不気味な笑みを浮かべた。

「やべっ、何か俺、眠くなつて来た」

「そう。じゃあ、お布団入って寝よう？」

「ああ、そうするよ」

小川はそう言つて、隣の寝室に入つて行つた。

泊まるつもりか？——そんな感じである。

（巧く行つた）

喜美子はそう思った。

「と言う訳なんだ」

「成る程、そう言う事か。だからあんたは、鈴木 千恵、小渕 孝
之を殺害した香川 喜美子を絞殺したのか」

「今朝な」

「小川さん、こっち向いて下さい」

はい——そう返事をし、小川は瞳の方を向いた。

「つぎけんじゃねえ！」

バシンッ！——瞳の拳が小川の顔面にヒットし、その衝撃で小川は
すっ飛んで壁にめり込んだ。

「てめえっ、昔の友人を殺されたから犯人殺しても良いと思つてん
のかっ！？」

天国の友人はそれで喜ぶのかっ！？」

「そんな事言われたって、あいつ放っておいたら、俺が殺されちゃ
うもん。」

俺はやられる前に手を打つただけだよ」

「腐つてる・・・お前の脳味噌腐ってるぜ！」

「五月蠅え！てめえに俺の気持ち解るか！？」

「解らねえな・・・——でもよっ、これだけは言わせて貰う！

てめえが殺人者を殺した所で、被害者は帰つて来ねえんだぞ！」

その瞬間、小川は自分のした事に気付いた。

（これじゃあ、俺もあいつと一緒にだな・・・）

黙つて、警察に突き出してやりゃ良かったな・・・）

小川はそう思った。

「ねえ・・・」

小川は瞳に声を掛けた。しかし、返事は無かった。瞳は一体何処いずこへ？

7. 真相（後書き）

駄目ですか？これじゃ・・・。

エピソード（前書き）

おらおらっ、胡散臭いネタぶち込みまくったエピソードだ！読みやがれ！

エピソード

キンコンカーンコン——体育館内にチャイムが鳴り響く。
学園長が壇上に上がり、朝の挨拶をした。その挨拶はとても長く、
15分は掛かった。

そして、学園長の挨拶が終ると、表彰式が始まった。

「これより、表彰式を行います。黒田 瞳さんは壇上に上がって下さい」

瞳は壇上に上がった。

目の前には、学園長と学園事務員が立っている。

学園長は、表彰状を取り、読みあげた。

「表彰、黒田 瞳。」

右の者は5年前の放火事件、今回の殺人事件を解決したとして、
此処に評する。

平成18年12月7日。

東京都千代田区、警視庁」

学園長は読み終わると、それを引っくり返し、瞳に渡した。

瞳はそれを受け取ると、学園長に会釈をし、壇上から降りて行った。

「楓、これはお前にくれてやる」

と、瞳は楓に表彰状を渡し、体育館から去って行った。

こうして、この事件は幕を閉じた。

おまけ…糞ネタ特集1

放課後、一人の男子生徒が男子トイレに入ると、ロングヘアの可

愛い少女が、そこにいた。

「黒田さん、此処男子便所だよ？」

「何言ってるんだお前？」

オレは女じゃなくて男だ」

この時、男子生徒は思った。

（馬鹿な・・・黒田さんが男だってっ！？有り得ないそんなの！俺は夢を見てるのか？）

と・・・。

「信じられないって顔だな。なんなら、調べてみるか？」
瞳はそう言って、ズボンを脱ぎ始めた。

こっから先は作者の独断によりカットだ！自分で想像してみてください！じゃあな！

エピソード（後書き）

「糞ネタ特集1」

ナ.. 「何ですかこれは？」

作.. 「おまけですよ」

ナ.. 「それは分かってますよ！」

作.. 「じゃあ何だ!？」

ナ.. （睨むなよ・・・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1607b/>

不良少女探偵・黒田瞳の事件簿．．． 殺害された赤馬

2010年10月8日15時43分発行